

永久に咲く貴公子

— 『建礼門院右京大夫集』における平資盛の形象—

The noble man who blooms forever
—Shape of Sukemori Taira in “Kenreimoninukyodaibusu”—

鈴木 茉莉子
Mariko Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：右京大夫，資盛，星
Key words：Ukyodaibu, Sukemori, Star

1. 研究目的

本研究で取り扱う『建礼門院右京大夫集』（以下、『右京大夫集』）は、高倉天皇の中宮である平徳子への宮仕え、都落ちに始まる平家一門の没落、恋人である平資盛の戦死、後鳥羽天皇への再出仕までを描いた約三六〇首の自撰の家集である。その作者・建礼門院右京大夫（以下、右京大夫）は、平安時代後期から鎌倉時代前期の女性歌人である。

作品の主題は、宮仕え時代の華やかな平家文化圏とその中で起きた資盛との恋愛、そしてそれらが戦乱によって失われたことへの追憶である。作者は資盛の死について「なべてはかなき例にあらざりける」と言っており、その想いの強さが見て取れる。

作品には、その主題を軸とした意図的な構成意識と創作の意識が存在すると見ている。本研究では、その中で資盛がどのようなモチーフ（歌語、景物、色等）を意図的に用いて、どのような人物像として造型されているのか（これを「形象化」と称する）を明らかにする。

『右京大夫集』においては、「雪」という景物と資盛との関連が特に強く見られる。

また、資盛追憶の想いが特に象徴的に表れている箇所として、「雪」と資盛との思い出を回想して詠む場面（一一五、二四八～二四九）、一一五に続いて「朝顔」と資盛との思い出を回想する場面（一一六～一一七）、資盛追憶の旅路で作者が見た「星」の夜空について詠む場面（二五二）、平家一門都落ちと時期を同じにし、尚かつ星合の空に資盛を彷彿とさせる「七夕」を景物とした七夕歌群（二七

二～三二二）に注目している。

即ち、「雪」を中心に、「朝顔」、「星（七夕を含む）」という景物を資盛の形象に関わるモチーフとして注目することができる。加えて、右京大夫が仕えていた徳子や資盛の兄である維盛を中心として平家一門を捉える視点とも関わる「花」という景物や、『右京大夫集』の特徴でもある色彩表現も資盛の形象に関わってくると考えられる。

2. 研究実施内容

本研究では、これらのモチーフを軸として、手がかりとなる歌語について新編国歌大観を参照して先例・同時代歌を調べて『右京大夫集』の独自性を見出しながら、場面ごとの分析を行うことで、資盛の形象を探っていく。

一一五、一一六～一一七は、時間的な繋がりはないものの資盛との思い出の回想が連続して配置されている箇所として先行研究でも注目されている。その中でも「雪」と資盛との思い出である一一五を、「雪」を問題として資盛の形象を考えるにあたり、軸となる場面に位置づけた。

加えて、二五二は、資盛追憶の暗い旅路の記述の中で際立って美しい描写として注目されており、資盛や平家の人々の靈魂を星空に見ているとする説も存在する。本研究では資盛追憶の想いが表れている箇所として捉え、「星」を問題として資盛の形象を考えるにあたり、軸となる場面に位置づけた。

具体的な手順としては、まず、一一五について、「大内にて」（二四八～二四九詞書）と対照的な

「里にて」(一一五詞書)、「雪の朝」(一一五)の類似表現である「雪のあけぼの」(五一)、「雪の朝」(一一五)という言葉、「雪」の持つ罪障という意味合い、一一五の特徴でもある資盛の姿の詳細な描写を手がかりに、「雪」を軸として資盛の形象の分析を行った。

次に、一一六～一一七について、資盛の死に対する「なべてはかなき例にあらざりける」(一一六～一一七詞書)という言葉、一一六～一一七における「朝顔」の色彩表現、一一五との繋がりを手がかりに、「朝顔」を軸として分析を行った。

次に、もう一つの「雪」と資盛との思い出の回想である二四八～二四九について、「大内にて」

(二四八～二四九詞書)、「雪と消えにし人」(二四八)、「橘」(二四八)という言葉、「雪」の持つ罪障という意味合い、一一五～一一七との関わりを手がかりに、一一五における「雪」との比較をしながら、「雪」を軸として分析を行った。

そして、二五二について、「ことに晴れて」(二五二詞書)という言葉、「雪」との繋がり、「花の紙」(二五二詞書)から「花」との繋がり、七夕歌群(二七二～三二二)と七夕歌(一六七)から七夕の「星」との繋がりを手がかりに、「星」を軸として資盛の形象の分析を行った。

なお、色彩表現については、白色と、『右京大夫集』中で資盛と関連深く記述されていると考えられる「縹」色について、それぞれのモチーフの分析の中で適宜言及した。

3. まとめと今後の課題

分析の結果、「雪」は、「朝」の光に照らされて輝きを増し、時として幻想性のある白さを作り出し、その眩い白さが資盛の鮮やかさを際立たせ、資盛との回想に登場することで寂しさではなく温かさを持つものとして描かれ、「朝顔」と同じく無常の記号を持ち、この世に在り続けることが叶わず資盛と共に消えていくものだった。また、「雪」の罪障としての意味合いから、資盛を形象しながら、右京大夫自身の求道心や資盛の後世を弔う心情をも形象しており、「雪」は『右京大夫集』中で資盛と右京大夫を繋ぐ媒介としても機能していると言えよう。

「朝顔」は、「有明」の光を受けてその輝きを増し、無常の記号を持ちながらも光に照らされながら咲く姿は資盛の後朝の顔と重ねられ、資盛と関わることで白色の中に縹色を暗示するものだった。

「星」は、「雪」「朝顔」と同じく白い輝きを持ちながらも、永久という真逆の記号を持つものとして描かれ、また、資盛含む平家の人々の華々しさを表す「花」を永久に輝かせ続ける媒介としても機能していた。

この研究結果から構成意識のある『右京大夫集』の中で、更に資盛の形象に関わる構成意識を、限られたモチーフの中ではあるが少なからず解明できたのではないか。

今後は『右京大夫集』の中での場面同士の関わりを更に検討し、先例歌・同時代歌との比較を更に進めることで、『右京大夫集』の独自性という観点をもっと洗練させていくことが課題である。